白薇・王慶仁・鄭玉琴編

中国少数民族婦女問題研究

中央民族大学出版社（北京）／1996年／272頁

高　明潔

中国少数民族の女性問題は中国の女性問題であるばかりでなく、世界の女性問題の重要なテーマとなっている。一九九三年、中国の中央民族大学で「少数民族婦女研究中心」（少数民族女性研究センター）が成立し、また一九九四年、研究センターの成立一周年の際に、「少数民族婦女問題研討会」（少数民族女性問題シンポジウム）を招集し、教育問題の核心をなす少数民族女性問題に対して広汎な討議が行われた。会議において発言が及んだ問題は『中国教育報』（中国教育新聞）や中国国際広播電台（中国国際ラジオ放送局）等のマス・メディアにおいて重視された。一九九五年九月、第四回世界女性会議が北京において開催され、政治学・教育学・社会学・人口学等の立場から、中国の女性問題研究に対してさらに新たな課題が数多く出された。『中国少数民族婦女問題研究』は、第四回世界女性会議が推し進められる中で、「少数民族女性問題シンポジウム」による発言を基礎とし、さらに中央民族大学女性教授連絡友誼会が開催した「平等与発展

婦女問題研究討論会」（〝平等〟と〝開発〟女性問題シンポジウム）における論文を、一九九六年十一月中央民族大学が出版・発行した特集テーマの論文集において収めたものである。

現在までのところ、中国国内の少数民族女性問題に関する研究は、一般の記事・エッセイ・紹介のレベルのものであり、例えば、『中国婦女伝説故事』（中国女性の伝説・物語）（李蒙編、新華出版社、一九八五年）などは少数民族婦女の風俗習慣の紹介を中心とする文集であり、また少数民族の女性問題に関わる文章もあるが、多くは各種の新聞・雑誌上に散在する。換言すれば、少数民族の女性問題研究は比較的手薄であり、集約された形式のものはないともいえる。それゆえ『中国少数民族婦女問題研究』を出版することは、折よく少数民族女性問題研究の空白を埋めることであり、歓喜に値することであるといえよう。

『中国少数民族婦女問題研究』には全部で二六編の論文が収められ、そのうち宗教学の視点からイスラム教民族の女性観を検討した「従〝古蘭経〟看伊斯蘭教的婦女観」（コーランから見たイスラム教の女性観）（丁宏著）、また例えば「草原婚礼啓示録――兼談蒙古族婚礼歌中的女性命運主題」（草原婚礼啓示録――モンゴル族の婚礼歌における女性の運命をテーマとして）（烏蘭傑著）、「当代中国的愛、性及新式音楽」（現代中国の愛・性・新しい音楽）（米国：柯真明・関辛秋著）は民俗文化の観点から中国少数民族の女性の運命を研究した論文である。さらには少数民族女性教育問題、就労問題、女性人口流動問題、文盲現象などについて詳述した論文が多く、例えば「少数民族地区女性文化教育問題初探」（少数民族地区女性文化教育問題入門）（包玉琴著）、「浅論少数民族婦女就業保護問題」（概説 少数民族女性就労保護問題）（李嵐著）、「浅析流入北京就業的朝鮮族婦女状況」（北京へ流入・就労する朝鮮族女性状況の分析）（鄭玉順、張型著著）などがある。この論文集は歴史学、宗教学、民俗学、社会学、教育学の観点から少数民族の女性問題に対して綜合的な研究を行った集大成であるといえよう。

この論文集において、特に以下二編の論著を紹介する。一つはチベット学者の格桑達吉・喜饒尼瑪が著した『試析西蔵婦女地位的変遷』（チベット女性地位変遷の分析）であり、二つには謝寧が著した『加速発展我国少数民族女性教育問題的対策研究』（中国少数民族女性教育問題の発展を加速する対策・研究）である。

『試析西蔵婦女地位的変遷』は六つの章からなり、チベット女性の地位の変遷に対し系統的に論述している。第一章チベット女性の歴史的解放、第二章チベット女性の法律的な地位、第三章チベット女性の宗教的生活における地位、第四章チベット女性の経済的な地位、第五章チベット女性の婚姻及び家庭における地位、第六章結び、参考文献・注釈となっている。

第一章のチベット女性の歴史的解放は、主に一九五九年、チベットにおいて封建的な農奴制を廃止し、民主的改革を実行して以来のチベット女性の政治・経

済・文化教育・社会生活などにおける変化を紹介している。例えば「人口に応じた土地分配」の原則の下で、女性と男性が平等に土地や草原を分けられ、『中華人民共和国選挙法』の規定の下で、女性も男性と同様に選挙権を得て、それによって歴史的にチベット女性、特に農奴階級の女性には何ら社会的地位が与えられていなかったものが変化した。

第二章はチベット女性の法律的な地位について、即ち紀元七世紀の吐蕃王朝の開始から一九九〇年代に至る時期におけるチベット女性の地位について詳細に回顧している。とりわけ十七世紀以来、異なった階級に置かれたチベット女性の運命に対して詳細な説明を加え、また一九五〇年代以後のチベット女性の地位の変化に対して具体的な説明をしている。

第三章はチベット女性の宗教的生活における地位について、チベット修道尼がチベット伝来仏教史上において重要な位置を占めていることを多くの事例をもって説明し、また女性が仏教文化において蔑視された宗教的背景があったことを指摘した。

第四章はチベット女性の経済的地位について、チベット封建農奴制度の下にチベット女性が従事した経済的活動とその置かれていた経済的地位について解明し、同時に多くのデータを用いて一九五〇年代に開始され一九九〇年代に至るチベット女性の就労や、社会活動等における根本的な変化を明らかにしている。

第五章はチベット女性の婚姻及び家庭における地位について、社会的、政治経済的な影響の下で、旧チベットのいくつかの婚姻形式や家庭様式を詳しく紹介し、チベット女性が家庭で置かれた地位、財産相続権について分析している。また一九五〇年代以来のチベット女性の家庭内の地位の変化、例えば女性の世帯主が全国レベルよりも高い比率となっていること、女性の出産に対する考えの変化などについても触れられている。

第六章の結びはチベット女性の地位の変遷における政治および文化的な背景を指摘し、同時にチベット女性問題研究に対して、さらに多くの空白部分を埋めなくてはならないことを示している。

近年、チベット学研究は中国および世界の関係機関の人々に重視されている。併せて多大な成果を生んでおり、例えばこの論文の中で取り上げられているチベット女性研究の著述『智慧的女性』、『神秘的女性』、『空母行』等、あるいはB. Miller の『評婦女在仏教地西蔵的作用』、Anne C. Cline の『原始的貞潔与日常生活——高尚的女性象徴及西蔵婦女』等である。しかし、この論文の二名のチベットの作者が指摘するように、チベット文資料の発掘は人々の注意を惹き始めたばかりであり、多くの研究は未だ初歩的な状態に置かれているといえよう。

評者は『試析西蔵婦女地位的変遷』には以下のいくつかの特徴があると考える。第一に大量のチベット語原典の文献を引用していることである。結びの部分を除く全文の各論述において、一つの観点を解明して一つの現象を説明する時に、チベット語の原典を引用している。例えば『西蔵古代法典』、『狩猟法』、『十六法』等であり、同時にチベット族固有

の言語の解釈から着手して、チベット族特有の文化的現象を説明している。例えば「摩覚：mo-gcod」（修道尼）、「札介巴：tzab-je-pa」（養子）などである。第二に論述の中で大量の統計データを用い、チベット女性の社会生活の各方面における変化を強調し、各部分には五〇年代から九〇年代の各年代のデータを使用し、読者に根拠を与えている。また同時に、これらの数値はチベット問題研究者にも有益で参考となろう。第三にこの論文は「チベット女性の地位の変遷」というテーマをめぐって、政治・宗教・経済・家庭・婚姻の各観点からチベット全体の社会特有の文化様式が呈示されるものとなった。特筆されることは、この論文の二名の著者はともにチベット族の学者であり、自らの民族文化に対する深い理解が彼らの言葉遣いに現れている。同時にその文章の風格には文学作品のような感化する力があり、一般の学術書にあるような無味乾燥な感じを与えない。また評者自身も大いに参考とするところである。現在チベット研究は尚、発展段階に置かれているが、この論文はまぎれもなく優れた力作であるといえよう。

次に紹介するのは謝寧氏が著わした『加速発展我国少数民族女性教育問題的対策研究』である。この論文は社会学の方法を用いており、六つの部分に分けられ、中国少数民族の女性教育の現状を紹介し、分析を加え、また問題解決のための対策を講じている。

第一章は中国の少数民族女性の発展の状況について述べている。著者は「少数民族婦女人口増長的数据」（一九九〇年）、「少数民族婦女在婚姻、生育、児童予期寿命、文盲率、文化教育水準、生活質量指数上優於漢族的統据数据」（一九九〇年）及び「中国少数民族婦女教育成就和従業状況」（一九九〇年）の統計データを用いて、以下のような現状を示した。

① 少数民族の女性総人口は全中国の女性人口の八・一一％を占め、少数民族の総人口の四八・七一％を占める。また一九九〇年の少数民族の女性人口は一九八二年に比べて三四・八％増加し、一九八二年から一九九〇年の年平均増加率は三・八％であり、さらに少数民族の〇－十四歳女子は全中国〇－十四歳女子人口の一〇・一五％を占める。

② 初婚年齢において、漢族の初婚年齢よりも遅い少数民族は七民族。女性の出産率が漢族よりも低い少数民族は七民族。少数民族の女性一人が平均四人以上の子供を育てる民族は八民族あり、漢族女性一人が育てる子供の数は中国の民族中の第九位。成人女性の文盲率では五民族（朝鮮、満、カザフ、モンゴル、チワン）の文盲率が漢族よりも低い。「文化教育綜合平均値」は三民族（朝鮮、満、モンゴル）の女性が漢族の女性よりも高い。各専門技術者の中において、五少数民族（モンゴル、回、朝鮮、満、カザフ）の女性の比率は漢族の女性よりも高い。

第二章は中国少数民族女性教育の中に存在する主要な問題について述べられている。「全国文盲、未入学学齢児童的人口分布」（一九九〇年）および「甘粛、青海、寧夏小学未入学学齢女童比例比較」（一九九〇年）の二つの統計が示すところでは、少数民族の七－十一歳の未就学

女子児童の総数は全国の未就学女子児童総数の八六・四％を占める。また甘粛、青海、寧夏の三つの省・区における未就学（小学校）の女子児童は、三つの省・区における未就学児童総数のそれぞれ八五・七％、五八・八九％、九四・六三％を占める。

第三章は中国少数民族女子児童教育の重要性について述べ、女性の素養の向上が民族全体の素養を向上することを強調している。

第四章は中国少数民族の女子児童の就学難について述べ、様々な原因を分析し、経済発展・交通条件・教育経費・価値観念・教学方法等の客観的および主観的な原因から、少数民族女子児童の就学における様々な障害を分析した。

第五章は中国少数民族女子児童の就学難を解決する措置について述べ、国家による政策の制定から具体的な実施に移すこと、貧困の改善から少数民族地区の義務教育を進めること、教育体制の管理および改革から伝統的な観念を新たなものへと変革することにより、少数民族地区の女子児童の就学難の現状を変えていくことを述べた。

最後の結び部分は、中国の各種事業の改革の遅れが、文盲の滞留とりわけ少数民族の女子児童の教育に現れていることを示した。この論文は厳しい現実を指摘した。①中国の文盲率が高い（世界の文盲の四分の一を占める）。②大学生が人口に占める比率が低い（一九八四年数値で、中国は一万人中一三・八人、インドは七七・六人、アメリカは一七九・五人、日本は二〇〇・六人、オランダは二七〇・四人）。また、「人の〝開発〟」研究が新世紀の研究の重要な構成部分であるが、人類の半分の人口即ち女性の〝開発〟に関する研究は必ずしも十分に認識されていないことに言及している。この論文の終わりの部分で、一つの国の物質的文化および精神的文化の発展レベルを判断するには、女性――他でもなくその国の人口の半分を占める――の資質が如何に〝開発〟されているかにあると指摘している。

『加速発展我国少数民族女性教育問題的対策研究』には二つの顕著な特徴がある。第一は社会学的な統計を用いる方法をとり、膨大なデータを挙げ、著者の述べようとする事実が読者に一目瞭然に伝わってくる。第二に著者は比較して検討する方法を採り、①データ――少数民族女性と漢族女性の各方面における比較、②比較分析――例えば第五章で用いられた発展途上国の教育費用の比率は平均四・一％であることは、中国は従来より二・四二％前後を上下する苦境にあることを説明している。上述したデータおよび比較分析という二通りの論証を経て、読者にその根拠と筋道を示している。同時に著者は少数民族の女子児童の就学難の現状を指摘する際に、少数民族の女性全体のレベルに対しての根拠となる客観的な見通しを重視している。例えば第一章で用いられているデータは、多くの少数民族の女性が受ける教育のレベルや各種専門技術を修得するレベルが漢族女性の水準を遙かに越えているという事実を示しており、著者は今後の少数民族の女性教育工作に対する楽観的な立場を表明して

いる。概して言えば、この論文は国内外の読者や学者が中国少数民族の女性全体の状況を理解する上で大きな手助けとなろう。また膨大な統計データも参考にできればかなりの価値があろう。これはマクロ的な視点から少数民族の女性問題を研究した論文である。著者の謝寧氏は、その他にも、『面向二一世紀基礎教育和民族教育』（二十一世紀に向けての基礎教育と民族教育）等の専門的な論著を出している。

中央民族大学中国少数民族女性研究センターが編集する『中国少数民族婦女問題研究』の中において、さらに日本の読者に紹介したい文章があるが、紙幅の関係で、上述した二編の論文のみを主として紹介した。

一九九五年は国連が成立して五十周年であり、「国際婦人年」[1]の二十周年でもあり、また「ナイロビ将来戦略」[2]が採択されて十周年の年でもある。このような意義を持った一九九五年九月四日―十五日に北京で開催された第四回世界女性会議は、中国の各民族の女性および世界各国の女性のために、〝平等〟・〝開発〟・〝平和〟などの事業に新たな息吹を吹き込み、世界の人口の半分を占める女性の教育・開発の追求のために、新たなテーマを示した。このような原動力の下に、『中国少数民族婦女問題研究』を出版することは、まぎれもなく少数民族の女性問題研究や民族問題研究者にとって大きな力となろう。評者は中日両国の少数民族女性問題研究の専門家によって今後ともさらに優れた論著が世に問われることを期待したい。

〈1〉 国際婦人年である一九七五年に、第一回世界女性会議がメキシコシティで開催された。

〈2〉 一九八五年に第三回世界女性会議（婦人の十年最終年世界女性会議）がナイロビで開かれ、「西暦二〇〇〇年に向けての女性の地位向上のための将来戦略」を採択した。

（邦訳　藤森　猛）